

現代ドイツにおける ヘーゲル『精神現象学』の研究史

飛 田 満

小論の目的は、ヘーゲルの主著『精神現象学』の研究史を概観し、その趨勢におおよその見通しをつけることである。とりわけ以下の考察においては、1960年代から今日に至るまでの現代ドイツにおける諸研究に焦点を当てて、これらをいくつかのタイプに分類整理しながら、20世紀後半の研究成果を総括することを試みたい。

第1節 ペゲラーとフルダの論争

1960年代以降ドイツでは、ヘーゲル・アルヒーフ (Hegel-Archiv) の創設と国際ヘーゲル連盟 (Internationale Hegel-Vereinigung) の設立とを背景に、一方では厳密な文献学的考証に基づく最新のヘーゲル全集^①が逐次刊行され、他方ではこの事業の成果を論文や報告の形で毎年公表すべく機関誌『ヘーゲル研究』^②が発行されるに及んで、ヘーゲル研究は全体として飛躍的な発展を遂げた。実際、『精神現象学』研究だけをとりまいても、ちょうどこの頃から、この著作の理念や成立、構成や論理に関する周到な研究が相次いで発表され、なかには従来の解釈を大幅に修正するような画期的な労作も現れた。オットー・ペゲラー (ヘーゲル・アルヒーフ所長、ボーフム大学教授を歴任) とハンス・フリードリッヒ・フルダ (ハンス・ゲオルク・ガダマー、ディーター・ヘンリッヒの後を継いで、国際ヘーゲル連盟会長、ハイデルベルク大学教授を歴任) との間に行われた論争は、まさにそうした新しい研究の出発点をなすものである。

ここでやや象徴的な言い方が許されるならば、体系の「第一部」でありかつ「序論」でもある著作 (『精神現象学』) の「理念」とは如何なるものか、というオットー・ペゲラーが『ヘーゲル研究』の第一巻で提起した問いとともに現代の『精神現象学』研究は始まった、とすることができる。というのは、なるほどこの問い自体はすでに19世紀の諸研究においても注目されてはいたのだが、ペゲラーはこれをきわめて綿密な文献学的な研究によって、しかもそれまでの解釈^③を全く覆すような仕方で解決しようと試みたからである。ペゲラーによれば、ヘーゲルは当初「意識の経験の学」を計画し、その重点を「自己意識」の章におきながらも「絶対知」にまで及ぶ展開を予定していたが、実際には、彼は「理性」の章において、この計画を変更せざるをえなかった。というのは、「理性」の章は他の章に較べて量的に不釣合だけでなく、他の章が満たす要求 (歴史的発展の下に入れられるという要求) を満たしてもいないからである。そのために、著作の重点は「自己意識」の章から「精神」「宗教」の章に移行し、「意識の経験の学」は「精神の現象学」に変容した。こう

した解釈に基づいてペゲラーは、ヘーゲルが執筆中に著作の構想を変更したこと、したがってまた『精神現象学』が統一的に構想された著作ではないことを指摘したのである⁽⁴⁾。

ハンス・フリードリッヒ・フルダは、ペゲラーとは異なり、発展史的な視点からではなく体系的な視点から『精神現象学』の構造や分節化に関する解釈を試みている。彼は、ヘーゲルが最初から意識の諸形態と論理的諸契機との間の厳密な対応について考えていたことを指摘し、「現象学は一連の論理的諸契機の上に組織され、この一連のものはヘーゲルの当時の論理学構想に対応するとともに現象学内部における統一的機能をもっている」というテーゼを打ち立てた。そしてそこから、『精神現象学』は体系的統一をもった著作であり、たとえ執筆中に構想の変更がなされたとしても、それは『精神現象学』の論理的基礎に抵触しない程度のものであった、という結論を引き出している⁽⁵⁾。

ところで、フルダがここで「当時の論理学の構想」について語るときに考えているのは、1804/05年の体系草案（『イェーナ論理学・形而上学』）のなかの、形而上学への序論と解された論理学のことではなく、1805/06年の体系草案（『イェーナ実在哲学Ⅱ』）のなかの、それ自体ひとつの思弁哲学となった論理学（ただしヘーゲルは、この論理学を詳細に展開したわけではなく、わずかにスケッチしただけである）のことであるという点は注意を要する。フルダは、まさにこの断片的な論理学構想に対応する論理的諸契機が『精神現象学』の構想の統一性を保証する、と断じているのである。

フルダのこの解釈は、1964年の国際ヘーゲル連盟の会議で発表され、1966年の『ヘーゲル研究』の別冊第三巻に掲載された。ちなみにこの巻には、「精神現象学の解釈」をテーマとして、フルダのほか、ペゲラー、ガダマー、イポリット、ゴーファンらの寄稿が轟めいている。このうち非常に興味深いのは、ペゲラーもまたその寄稿において、フルダと同様にヘーゲルの1805/06年の体系草案のなかの論理学のスケッチに注目していることである。しかもペゲラーは、その際、フルダに対して、この論理学構想と『精神現象学』との対応に『精神現象学』の構想の統一性を直ちに結びつけることに異議を唱え、以前の自分の見解を擁護する態度を示しているのである⁽⁶⁾。

さらにフルダのほうもまた、その国際ヘーゲル連盟の会議での発表につづいて、『ヘーゲル論理学への序論[導入]の問題』という著作を公刊しているが、これは現代の『精神現象学』研究の緻密さを示すものとして、この領域における最初の代表的な労作である。彼はこの著作のなかで、ペゲラーの提起した『精神現象学』の「理念」をめぐる問いに関連して、およそ自己完結的な体系がもしかしたら体系に属さないかも知れない「序論」を許容するものであるのかどうか、そしてまたもしも許容するとしたら、いかなる機能をもちうるものであるのか、といった問題設定を出発点として、『精神現象学』と体系との関係をきわめて詳細に論じている。結論的に言って、フルダによれば、序論的な学としての現象学は体系完結のための条件ではなく、むしろ他の現象と並ぶ現象としての学として「体系外的な」(systemextern) 権利要求を承認し、その要求の正当性を公平に取り扱おうとするところにその存在根拠をもつというのである⁽⁷⁾。

なおまたホルスト・ヘニング・オットマンの著作『ヘーゲル哲学への序論[導入]の挫折』も、フ

ルダと同じ視点から『精神現象学』の可能性を問うたものであるが、しかし彼の場合には、現象学は同時に序論でありかつ学（体系）でもあるという要求を満たすことはできない、という否定的な結論に達している⁸⁾。

第2節 論理的・体系的な研究

現代ドイツの『精神現象学』研究においては、この著作全体の論述についてみても以前の単なる解説（これもまた重要であるが）の枠を越えた個性的なものが現れている。とりわけこの著作の論理的ないし体系的な把握をめざすものとして、ヴェルナー・ベッカー、ヨハンネス・ハインリッヒス、クラウス・アルトゥール・シャイヤーの研究は注目に値する。

このうちヴェルナー・ベッカーの『ヘーゲルの「精神現象学」』は、それまでの解釈学的なヘーゲル受容にも、またマルクス主義的なヘーゲル受容にも、等しく欠けていたヘーゲルへの「論理的・体系的なアプローチ」を、言い換えるとヘーゲルとの「ザッハリッヒな対決」を取り戻そうとする。だが、このベッカーの企てにもかかわらず、ただちに問題であると思われるのは、彼が『精神現象学』の「序文」と「序論」の解釈を、——それらは哲学的な論究の抽象的な結果とその要約とであるにすぎず、具体的な論証の展開ではないと決めつけて——全く省いてしまっていることである。これに関連して最も興味深い例を一つ挙げるならば、ベッカーは、ヘーゲルの自己意識理論を主観と客観との差異がいかにかに同一なものとされるかを明らかにするものであるとした上で、「この同一化の根底にあるのは、フィヒテによって基礎づけられた観念論的な〈自我〉概念を基盤にして獲得される特定の演繹である」と述べているが、彼がそのような解釈をとることができるのは、まさにヘーゲルが「序論」で展開した〈意識〉概念に基づくならば、フィヒテの観念論的な〈自我〉概念を基盤としては受け入れられないということを全く見逃してしまっているからである⁹⁾。

ヨハンネス・ハインリッヒスの『「精神現象学」の論理』は、フルダとペゲラーの論争の焦点ともなった現象学の諸形態と論理学の諸契機との「対応」の問題を主題的に取り扱っている。すなわち彼は、現象学的な思想行程が「意識の背後にある論理学」によって組織づけられているという想定から出発して、『精神現象学』における「思弁的論理」を再構成することにより、現象学と論理学との関係についての「体系理論的な問い」に一つの答えを与えようとする。だがその際、問題であると思われるのは、彼がもっぱらヘーゲルの1804/05年の『論理学・形而上学』に依拠しており、フルダやペゲラーがそうしたようにヘーゲルのイェーナ時代の論理学構想の変遷過程に十分な注意を払っていない点である¹⁰⁾。

クラウス・アルトゥール・シャイヤーの『ヘーゲルの精神現象学のための分析的注釈』は、「現象知の学」（精神現象学）の「建築術」（Architektonik）、すなわちこの学の方法論的な発展をそのすべての契機にわたって跡づけ、その論理的な構造を明らかにする。その際、この注釈がことさらに「分析的」と言われるのは、彼が外から何ものも加えずに言わば「身を捨てて」（à corps perdu）ヘーゲルの方法に従おうとするからである。とはいえ、彼の「措定」「否定」「否定の否定」あるいは「即自」「対自」「即自且対自」といった単純な諸規定による説明は余りにも図式的で、『精神現

象学』に特有の豊かな内実を全く伝えていないように思われる⁽¹¹⁾。

第3節 現象学的・存在論的・超越論的研究

現代ドイツの『精神現象学』研究においては、さらにこの著作の部分的にすぎない論述ながら、その論述の方法論的な巧みさによって全体的な論述をも凌ぐようなすぐれた論評も現れている。その多くは、主として現象学的・存在論的・超越論的な立場からするものであり、ヴェルナー・マルクス、ウルリッヒ・クレスゲス、オイゲン・フィンクの研究が最も代表的なものとして挙げられる。

このうちヴェルナー・マルクスの『ヘーゲルの「精神現象学」——「序文」と「序論」におけるその理念の規定——』は、その解釈をもっぱら「序文」と「序論」に限定し（彼によれば「序文」は「序論」を補完するものである）、著作に「内在的な」仕方で、『精神現象学』の「理念」を解明しようとする。「精神現象学は、最初から最後まで一貫して経験の学であるとともに精神の学である」というのが、彼の基本的な視座である。マルクスは、ある特定の歴史的状況に捕われた「自然的意識」と、絶対知に到達する道程の叙述の対象にまで「我々」すなわち哲学者によって高められた「現象知」とを区別する。彼によれば、ヘーゲルがこの「現象知の叙述」によってめざしているのは、一方では自分と同時代の意識（自然的意識）に絶対知の成立の必然性を証示するとともに、他方ではその同時代の意識に、それもまたこの叙述が挙示するような道程に身を委ねさえするならば絶対知に到達することができるであろうということに納得させることである⁽¹²⁾。

ウルリッヒ・クレスゲスの『現象知の叙述——ヘーゲルの「精神現象学」への体系的序論——』は、『精神現象学』を、超越論的哲学の基礎づけとしての「自己意識の歴史」がもつアポリアに対する一つの解答として了解し、この立場から『精神現象学』における証明の意図と構造を、その「序論」と「序文」および「意識」の三章（「感覚的確信」「知覚」「悟性」）の解釈によって解明しようとする。「精神現象学は、批判と理論との統一を実現するとともに、自己規定と自体存在の認識との統一を実現するところの一つの基礎づけ連関として理解され叙述されうる」というのが、彼の主張するテーゼである。というのは、この基礎づけのもつアポリアは、クレスゲスによれば、「予備学のアポリア」と「原理のアポリア」として定式化されるが、これらのアポリアは、さらにその解決のためにはこうした二つの「統一」の要請に導かれるものであるからである⁽¹³⁾。

オイゲン・フィンクの『ヘーゲル——「精神現象学」の現象学的解釈——』は、1966/67年の冬学期と1967年の夏学期のフライブルク大学での彼の講義から生まれた。この講義のなかで彼は、「事象そのものへ」という現象学的方法を、『精神現象学』という哲学史上のテキストの解釈に適用することを試みている。その意味でこの講義は『精神現象学』の現象学的な解釈をめざすものであるが、同時にまたそれはこの著作の存在論的な理解をめざすものである。すなわち彼は、ヘーゲルの思考のうちにある存在論的で宇宙論的なものを闡明すること、すなわち精神の意識化の、そしてそれとともに知の対象化の諸段階を存在の「明るみの場」(Lichtung)の諸駅として理解することを教える。このようにして彼の『精神現象学』解釈は、きわめてフッサール＝ハイデッガー的であり、また実際には「理性」の章の終わりにまでしか到達していないという問題もあるが、しかし

一貫して「ヘーゲルの思索の道とともに歩む」という彼の追思考的な姿勢によって、また彼の生彩に富んだ文体と事柄に即した議論とによって、我々は彼のこの講義から『精神現象学』への一つの良好なアプローチを得ることができる⁽⁴⁴⁾。

第4節 実践哲学的研究

現代ドイツの『精神現象学』研究のもう一つのタイプとして、一方では他のタイプと同様に文献学的な成果を基礎としながらも、他方ではマルクス主義的な哲学とは違った意味で実践哲学的な問題を解明することをめざして、この著作を分析し解釈するような研究が考えられる。ラインハルト・マウラー、マンフレート・ネーゲレ、ルートヴィヒ・ジープの研究は、まさにこのタイプに属している。

このうちラインハルト・マウラーの『ヘーゲルと歴史の終末』は『精神現象学』を歴史哲学の問題に向けて分析している。「ヘーゲル哲学は根本的に歴史の形而上学である」というのが彼の主要なテーゼであり、上掲書ではこのテーゼが、とくに『精神現象学』に即して展開される。言うまでもなく、伝統的な理解では形而上学とは現象の理論ではなく実在の理論であるが、ヘーゲル哲学においては実在とは自分を外化して歴史のうちに現象する「精神」である。とすれば、「精神の現象学」は、実は「歴史の形而上学」であり、しかもそれは、たんなる存在論的な実体の形而上学ではなく、かえって人間学的な主体の形而上学である、ということになる⁽⁴⁵⁾。

マンフレート・ネーゲレの『自由の直線——ヘーゲルの「精神現象学」についての解釈の試み——』は、『精神現象学』をカントとフィヒテの自由の哲学の路線の延長として解釈しようとする。『精神現象学』が自由を概念化する試みであるとしたら、ヘーゲルは自由と必然との間の矛盾にいかに取り組みのか、とネーゲレは問うている。だが彼のこの著作に内在的な解釈の結論は、ヘーゲルに対してむしろ否定的である。すなわち彼によれば、自由はいかなる「体系」をも粉碎する。そこで我々には、統一という思考されえないものを要請して、思考の永遠に循環的なプロセスのうちにとどまるか、あるいはこの思考されえないものと一体となるために、「判断」（根源分割）を中止するかのいずれかの可能性しか残されていない⁽⁴⁶⁾。

ルートヴィヒ・ジープの『実践哲学の原理としての承認——ヘーゲルのイエーナ精神哲学についての探究——』は、ヘーゲルが『イエーナ実在哲学』や『精神現象学』のなかで展開した「承認」の原理が、現代の実践哲学（ハーバーマス、アーベル、ロールズ、ロレンツェン等）が議論している他の原理（規範）以上に包括的な「制度」理論の獲得のために有効であることを示そうとする。ヘーゲルは承認の原理によって、ドイツ観念論の超越論的な自由の概念と古典古代のポリス的な人倫の概念とを総合する形で実践哲学の更新をもたらした、というのが彼のテーゼである。またこれとの関連で、ヘーゲルは意識の理論を駆使するようになってはじめて承認の原理を貫徹することができるようになった、とも彼は言っている。というのは、承認は、意識の自己自同性の分裂とその止揚の運動によってはじめて民族精神における普遍的意識との統一の経験にまで到達することができるからである。そしてこのような意識の経験の概念が十分に形成されたのは、もちろん『精神現

象学』においてのことである。ゾープはまた、ヘーゲルにおける承認のプロセスを二つの段階に区別する。その一つは、諸個人間の相互関係としての承認であり、もう一つは個別者と普遍者との間の相互関係としての承認である。そこで『精神現象学』においては、先ず前者が「自己意識」の章の「承認をめぐる闘争」において現れ、次に後者が「理性」と「精神」の章において現れることになる⁽¹⁷⁾。

第5節 文献学的研究とテキストの刊行

現代ドイツの『精神現象学』研究の成果として、厳密な文献学的考証に基づいて、70年代から80年代にかけて新たに刊行されたテキストの諸版についても触れておかねばならない。すでに『精神現象学』のテキストとしては、ヘーゲル自身によって出版された初版（1807年）のほかに、シュルツェ（1832年）、ボラント（1904年）、ラッソン（1907年）、ヴァイス（1909年）、グロックナー（1927年）、ホフマイスター（1937年）らによって編集された各版とその改訂版がそれまでに刊行されてきていたが、さらにヘーゲル生誕200年にあたる1970年以降には、新たに5つの版がこれらにつけ加わることになった。すなわち、エヴァ・モルデンハウアーとカール・マルクス・ミシェルが編集したズーアカンプ版（1970年）、ゲアハルト・ゲーラーの論評がついたウルシュタイン版（1970年）、ヴォルフガング・ボンジーペンとラインハルト・ヘーデが編集したマイナー『全集』版（1980年）、ロレンツ・ブルーノ・アンテルの解説がついたレクラム版（1987年）、そしてハンス・フリードリッヒ・ヴェッセルスとハインリッヒ・クレルモンが編集し、ボンジーペンの解説がついたマイナー『哲学文庫』版（1988年）がそれである⁽¹⁸⁾。このうちズーアカンプ版は、シュルツェによる旧ベルリン版を現代的な綴り方と句読法に改めたものであるのに対して、ウルシュタイン版は、初版にいつそう依拠したものであり、この種の現代化には慎重である。だがいずれにせよ両者とも、定評のあるホフマイスター版も含めて、今日の厳密に学問的な要求を満たすものではなかった。そこでドイツ学術振興会（Deutsche Forschungsgemeinschaft）の委託により、ヘーゲル・アルヒーフが新しい『ヘーゲル全集』の第9巻として歴史的批判的な『精神現象学』の決定版を刊行することになった。そのめざすところは、一言に尽くせば、厳密なオリジナルのテキストの復元である。したがって、レクラム版も『哲学文庫』版も、ともにこの『全集』版に基づいたものであり、さらにこれを現代的で実用的な要求と調和させたものである。

ところで、新しい『全集』版の編集者であり『哲学文庫』版の解説者でもあるヘーゲル・アルヒーフのヴォルフガング・ボンジーペンは、イエーナ期ヘーゲルの「否定性」の概念に関する研究をはじめとする、その文献学的にきわめて周到な諸研究によって、つとに現代の『精神現象学』研究の牽引者として知られている。彼は、その『哲学文庫』版の解説（「序論」）のなかで、ホフマイスターの序論をさらに掘り下げる形で、先ず「現象学」という用語の概念史を新たにラインホルトの現象学構想との関連において明らかにし、つづいてキンメルレ、ホルストマン、デュージングらによるイエーナ期ヘーゲルの体系的発展に関する最新の諸研究に基づいて、著作の「成立史」のより厳密な再構成を試み、さらに『精神現象学』の構想にとって決定的な意味をもつと思われる「意識の

歴史」の理念に着目しながら、著作全体の論証過程をスケッチし、最後にヘーゲル自身の後年の哲学体系における『精神現象学』の位置づけと、ヘーゲルと同時代の人々の書簡や書評にみられる『精神現象学』の受容史を、すぐれて文献学的な見地からそれぞれ捉え直している⁽¹⁹⁾。ホフマイスターによる第三版の序論からほぼ35年、ある種の隔世の感を覚えざるをえない。

第6節 1990年以降の諸研究

現代ドイツにおける『精神現象学』研究のうち、最後に、90年代すなわち20世紀最後の10年間に現れたボンジーベン以後の著作について触れておきたい。代表的なものとして、アンゲリカ・クレーズ、グスタフ・ファルケ、ヨーゼフ・シュミット、フランク・ペーター・ハンゼンの研究が挙げられる。

アンゲリカ・クレーズの『経験としての反省——ヘーゲルの主観性の現象学——』は、『精神現象学』を、それがあつた主観性理論のための新たな諸端緒に対してもつ重要性を考慮しつつ解釈している。と同時にそこでは、ヘーゲル弁証法的方法的中心である否定性概念が、その現象学的な根を自然的意識の経験のプロセスの中にもつことが証明される。そこで上掲書において主導的となるのは、ヘーゲルと結びついた主観性理論の可能性と射程とへの問いであり、またそこで重点がおかれるのは、自己意識の歴史性と内在性および自己意識の経験についてのヘーゲルの根本理解が最も明確になる箇所（「序論」「自己意識」「教養」「絶対知」）である。ところで現代ドイツにおいて、主観性理論的な問いへの関心を再び目覚めさせたのは、ディーター・ヘンリッヒであるが、意外にも彼は、主観性理論の枠組みのなかでのヘーゲル的な端緒に対して強い留保を表明している。がしかしヘンリッヒによって考慮されることの少ない『精神現象学』は、クレーズ理解によれば、ヘーゲルの他のいかなる著作におけるよりも、弁証法的な思考のザッハリッヒな動機を明らかにしている著作であるというのである⁽²⁰⁾。

グスタフ・ファルケの『概念把握された歴史——ヘーゲルの精神現象学における意識の諸形態の歴史的基礎と体系的配置、解釈と注解——』は、『精神現象学』のある新しい解釈の道を開こうとする。ファルケによればヘーゲル哲学は、古典的な形而上学の完成として読まれるべきではなく、現代の基本的洞察の先取りとして読まれるべきである。あらゆる完成は必然的に始まりでもある。そこで始まるものは、初めのうちはただ、終わるものの境界設定においてのみ定義される。逆説的に表現すれば、『精神現象学』は体系的な生活世界の分析として、また『論理学』は体系的な言語分析として読まれうる。これを歴史的に見れば、ヘーゲルは反省性の原則的に新しいレベルによって、カントやフィヒテやシェリングから区別されるということ、さらに彼は哲学にとって欺くことのできない世界の前理解への20世紀にだけ固有なわけではない洞察から出発したということである。そして体系的に言えば、彼の反省的に捉えられた体系思想において、根拠づけの問題をめぐる現代的議論のための寄与が見られるということである⁽²¹⁾。

ヨーゼフ・シュミットの『「精神」「宗教」「絶対知」——ヘーゲルの「精神現象学」からの同名三章についての注解——』は、『精神現象学』についての詳細な（465 ページもある）注解にして

同時に読みやすい理路整然とした解釈をもたらそうとする。シュミットによれば、『精神現象学』の大雑把な解釈は多数あるが、綿密なテキスト分析の試みはわずかしかない。このことはとくに「精神」「宗教」「絶対知」という後半三章に対して当てはまる。がしかしこれら三章は、この著作の全体がそれへと向かって流れ込むところの、最も重要で最も内容豊かな部分と見なされねばならない。かくしてシュミットはこの著作の前半の要約的な解釈につづいて、後半三章の内実をテキストそのものとの緊密な結びつきの中で解明して行くが、こうした仕方において、これまで読みとばされた箇所や解釈に抵抗してきた箇所など、多くのあいまいな箇所が明らかになるというのである⁽²²⁾。

フランク・ペーター・ハンゼンの『ヘーゲルの「精神現象学」——1807年の「体系-序文」に基づいて叙述された「学問の体系」の「第一部」——』は、単に「序文」についての注解であるにとどまらず、ヘーゲルの学的体系全体についての注解でもある。ヘーゲル研究において、体系全体に対して「精神現象学」がもつ意義は、依然として議論が行われているが、ハンゼンによれば、「精神現象学」とは、自体的にはすでに最初から学的な自らの行為について解明すべき意識の立場からする、ヘーゲルによる最初の体系全体についての叙述である⁽²³⁾。さらに同年にハンゼンは、『G.W.F.ヘーゲル「精神現象学」——入門的注解——』という、分量的にも構成的にもコンパクトな注解書を出版している。言うまでもなく『精神現象学』についての注解書を執筆することは、このテキストを単にもう一度書き写すことを意味してはいない。不必要な仕方でオリジナルから単にコピーが作り上げられるような叙述をもってしては、だれの役にも立たない。そうした考えからハンゼンは、この注解書において「真理の問い」を立て、またその問いに全くヘーゲル的な意味で、可能性による思考は客観的な知を結果としてもつという答えを与える。『精神現象学』における諸洞察において実際に、またあらゆる場合に根拠づけられた知が問題になっているかどうか、ケースバイケースで解明されるべきであり、またその際、この点でもヘーゲルの基準に従って、叙述と批判とが一つのものとして、形成されていなければならないというのである⁽²⁴⁾。

以上、1960年代から1990年代までの現代ドイツにおける諸研究について検討してきたが、実際、『精神現象学』に関する二次的文献の膨大な量には、汗牛充棟の趣がある。したがって、それらすべてを遺漏なく網羅することなどは、ほとんど不可能に近い。がしかし以上の考察において、最近40年間の『精神現象学』研究について、その趨勢におおよその見通しをつけるという所期の目的を達成することは、ある程度なしえたのではないかと思う。なお言うまでもなく、フランスやイギリス・アメリカなどにおいて、またわが国においても、非常にすぐれた研究が多数発表されているが、それらについては稿を改めて論じたい。

【注】

- (1) G.W.F.Hegel, *Gesammelte Werke, in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft*, hrsg. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Hamburg 1968ff.
- (2) *Hegel-Studien*, hrsg. v. O.Pöggeler u. F.Nicolin, Bonn 1961ff.
- (3) Vgl. Theodor Haering, *Die Entstehungsgeschichte der Phänomenologie des Geistes*, in: Verhandlungen des dritten Hegel-kongresses, hrsg. v. B.Wigersma, Tübingen/Haalem 1934, S. 119f.
- (4) Otto Pöggeler, *Zur Deutung der Phänomenologie des Geistes*, in: *Hegel-Studien 1*, Bonn 1961.
- (5) Hans Friedrich Fulda, *Zur Logik der Phänomenologie von 1807*, in: *Hegel-Tage Royaumont 1964. Hegel-Studien Beiheft 3*, Bonn 1966.
- (6) Otto Pöggeler, *Die Komposition der Phänomenologie des Geistes*, in: *Hegel-Studien Beiheft 3*.
- (7) Hans Friedrich Fulda, *Das Problem einer Einleitung in Hegels Wissenschaft der Logik*, Frankfurt a. M. 1965.
- (8) Horst Hening Ottmann, *Das Scheitern einer Einleitung in Hegels Philosophie. Eine Analyse der Phänomenologie des Geistes*, München/Salzburg 1973.
- (9) Werner Becker, *Hegels Phänomenologie des Geistes. Eine Interpretation*, Stuttgart 1971.
- (10) Johannes Heinrichs, *Die Logik der Phänomenologie des Geistes*, Bonn 1974.
- (11) Claus-Artur Scheier, *Analytischer Kommentar zu Hegels Phänomenologie des Geistes. Die Architektonik des erscheinenden Wissens*, Freiburg/München 1980.
- (12) Werner Marx, *Hegels Phänomenologie des Geistes. Die Bestimmung ihrer Idee in Vorrede und Einleitung*, Frankfurt a.M. 1971.
- (13) Ulrich Claesges, *Darstellung des erscheinenden Wissens. Systematische Einleitung in Hegels Phänomenologie des Geistes. Hegel-Studien Beiheft 21*, Bonn 1981.
- (14) Eugen Fink, *Hegel. Phänomenologische Interpretation der Phänomenologie des Geistes*, hrsg. v. J.Holl, Frankfurt a. M. 1977.
- (15) Reinhart Maurer, *Hegel und das Ende der Geschichte*, Stuttgart 1965, Freiburg/München 1982.
- (16) Manfred Negele, *Grade der Freiheit. Versuch einer Interpretation von G.W.F.Hegels Phänomenologie des Geistes*, Würzburg 1991.
- (17) Ludwig Siep, *Anerkennung als Prinzip der praktischen Philosophie. Untersuchungen zu Hegels Jenaer Philosophie des Geistes*, Freiburg/München 1979.
- (18) ① *Hegel Werke in zwanzig Bänden 3*, Redaktion E.Moldenhauer u. K.M.Mischel, Frankfurt a. M. 1970.
 ② *Ullstein Buch*, mit einem Nachwort v. G.Lukács, Texte-Auswahl u. Kommentar v. G.Göhler, Frankfurt a.M./Berlin/Wien 1970 u. 1973.
 ③ *Gesammelte Werke 9*, hrsg. v. W.Bonsiepen u. R.Heede, Hamburg 1980.
 ④ *Universal-Bibliothek 8460*, Nachwort v. L. B. Puntel, Stuttgart 1987.
 ⑤ *Philosophische Bibliothek 414*, hrsg. v. H.-F. Wessels u. H.Clairmont, mit einer Einleitung v. W. Bonsiepen, Hamburg 1988.
- (19) Wolfgang Bonsiepen, *Einleitung*, in: *Philosophische Bibliothek 414* (⑤).
- (20) Angelika Kreß, *Reflexion als Erfahrung. Hegels Phänomenologie der Subjektivität*, Würzburg 1996.
- (21) Gustav-H. H. Falke, *Begriffne Geschichte. Das historische Substrat und die systematische Anordnung der Bewußtseinsgestalten in Hegels Phänomenologie des Geistes. Interpretation und Kommentar*, Berlin 1996.
- (22) Josef Schmidt, *Geist, Religion und absolutes Wissen. Ein Kommentar zu den drei gleichnamigen*

Kapiteln aus Hegels Phänomenologie des Geistes, Stuttgart/Berlin/Köln 1997.

- ③ Frank-Peter Hansen, *Hegels Phänomenologie des Geistes. Erster Teil des Systems der Wissenschaft dargestellt an Hand der System-Vorrede von 1807*, Würzburg 1994.
- ④ ders., *G.W. F. Hegel: Phänomenologie des Geistes. Ein einführender Kommentar*, Paderborn 1994.